

# 第6回法華経寺 祖師堂見学会

日本建築研究所 代表取締役

ふる かわ とし お

古川敏夫

修復後外陣見上げ



## はじめに

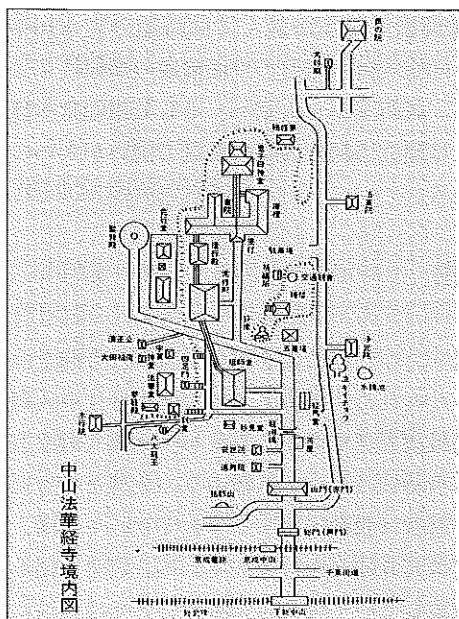
久方振りに法華経寺を訪ずれた。総武線下総中山駅で降り、北口駅前商店街から参道へと向かう。この付近は国府台から続く下総台地を形成しており、昔時は江戸名所図絵に描かれたように松や雑木林の多い場所でもあり、わずかながら面影を止めている。江戸期建立と伝えられる総門を通り抜けると山門に達する。ちょうど4月のやや肌寒い季節であったが、桜の花がほころび始め参道の景色が映えている。両側には塔頭寺院が続き、境内は静寂さがあって正面に元和8年(1622)建立の五重塔が見える。目を左に移すと現在修復工事中の祖師堂の仮設素屋根が境内を大きく塞いでいる。五重塔は本阿弥家の本願で加賀前田公の寄進になる。法華経寺は本阿弥光悦とのかかわりも深く、祖師堂、法華堂ほかの扁額も残されており、境内には室町期建立と伝えられる法華堂、四足門もあって歴史の厚みが感じられる。



修復後外陣細部

今回、祖師堂の解体修理がほぼ完成に近づいたことで、木質系構造分科会開催による「第6回祖師堂見学会」に飛び入り参加をした。懇談会の席上で、ゲストの坂本功先生は文化財建造物と耐震補強のかかわりを行政サイドとの関係において述べられた。特に、阪神・淡路大震災を契機として文化財保存修復の面でも積極的に見直す時期にきていると言えよう。私は日本の伝統建築を専門とする設計監理事務所を主宰しているが、建築構造設計については専門外であるのでこれ以上の論考はさし控えさせて戴くこととする。以降、法華経寺の祖師堂について私論を交えて一宗教・建築・歴史一の面を話を進めることにしたい。この機関誌の主旨からは異なる内容になると思うが祖師堂建築を理解するうえで必要であろう。また、祖師堂を見学するうえでの一助としていただきたい。

83



中山法華経寺境内図  
中山法華経寺誌より

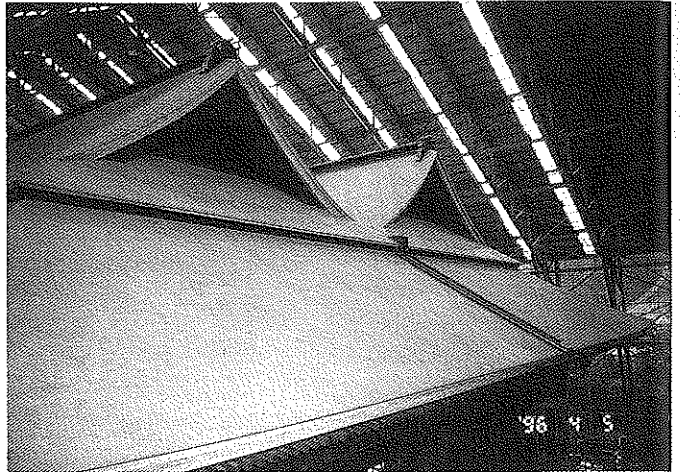
## 御影堂建築の時代

法華経寺は日蓮宗寺院である。寺の成立は今から450年ほど前の天文14年(1545)第10世日僊聖人の時まで下り、さらに250年前の永仁元年(1293)初代日常聖人による法華寺開創へと溯る。今から約700年前のことである。ここで法華寺開創まで話をするのは祖師堂建築および成立ちの背景を理解するためである。

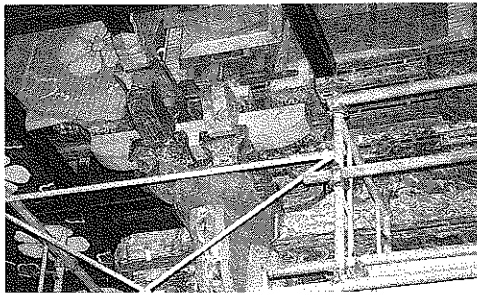
日蓮聖人が弘安5年(1282)に入滅し、中山門流で法灯を継いだ日常聖人と第2世日高聖人が入滅すると直接日蓮聖人



修復後内陣見上げ



修復後屋根外観



修復後内陣細部

と面授の弟子がいなくなることになるため、第3世日祐聖人は観応2年(1351)御影堂の建立に取りかかったと思える。現祖師堂の前身建物である。ちょうど釈尊入滅後に仏塔や仏像が出現したように。発掘調査に見るかぎり、南北朝時代の地層から5間×6間の御影堂跡が出ており、さらに下層に仏殿跡も確認され、正中3年(1326)建立の本妙寺仏殿跡と思われる。元徳3年(1331)若宮(現、奥の院)の法華寺仏殿建立の時期と合わせて、両建築併立の初期伽藍ができた。

御影堂建立後、中心は本妙寺(現、祖師堂付近)へ徐々に移っていく。さらに、200年ほどたった永禄11年(1568)には御影堂北側に若宮法華寺から法華堂が移建され、現在に見るような御影堂を中心として周囲に鬼子母神堂、妙見堂、太田稲荷堂などの守護神堂を伴った伽藍配置が完成したと思われる。法華経寺では御影堂(現、祖師堂)が伽藍中心建築となっているのはこの理由による。

御影堂はその名のごとく宗祖日蓮聖人をお祀りする御堂である。日蓮聖人に帰依した高木常忍(第1世日常聖人)は邸内に持仏堂を建立し釈迦像を祀った。常忍が出家した建長5年(1253)頃であろうか。日蓮聖人の下総下向の時期である。釈尊が王舎城にあった霊鷲山で行なったように日蓮聖人にとって法華経の初転法の霊場が持仏堂(法華堂)であったと言えよう。

## 祖師堂建築の時代

現祖師堂の建立の記録は延宝6年(1678)の上棟時の棟札に見え、それ以前から再建工事の準備に入っていたと思える。江戸初期は幕府の宗教統制もきびしく、慶長度、元和度、寛永度に続いて寛文5年(1665)には後の規範ともなる諸宗寺院法度並びに下知状が出された。建築に関する法度は新仏刹建立の禁止、修復仏閣の華美禁止などで鎌倉幕府の式目の先例にならった感がある。特に日蓮宗においては不受不施派の禁圧に動き、本寺末寺の内紛も絡んで法華経寺も例外ではなかった。祖師堂再建の前までごたごたが続いている。

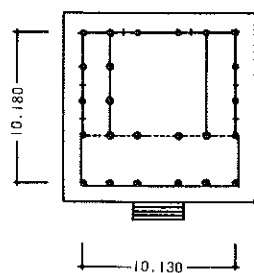
祖師堂建立の発願は第38世日秀聖人が在山時の寛文9年(1669)以降と考えてよいと思う。延宝6年(1678)の上棟を経て、元禄15年(1702)の落慶法要までに実に33か年を費やしていることになる(第38世日秀聖人から数えて16代目にあたる第53世日啓聖人まで)。以前、大堂と呼ばれていた御影堂とは比較にならぬ規模をもち、大工事であったことが推察される。

また、江戸初期は御影堂建築が盛んで同時期の寛永16年(1639)建立になる知恩院御影堂との平面構成の類似性を上げることができよう。御影堂から大堂へ、そして祖師堂へ移り変わっていることは建立当初との時代背景の違いが大いに関与していると言える。

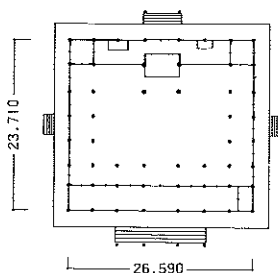
## 祖師堂建築の特徴

現祖師堂は建立以来たびたび改修を受けており、今回全面的に保存修復工事がなされた。特徴ある外観屋根は比翼入母屋造りと呼ばれ、柿板鍍葺きである。ただし、比翼入母屋造りという名称は建立当時にはない。八幡造りの変型とでも言えるかもしれない。筆者は設計実務するうえで意匠や架構、その意味や意義付けは充分検討を行なっている。建築を創るうえでその型式を決定していく場合、当時においては普請に

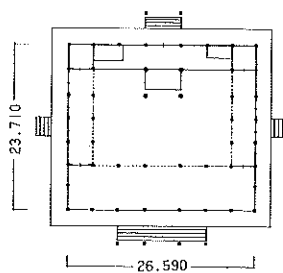
携わ  
を決  
めた  
る。  
ると  
幡造  
幡造  
たの  
疇と  
術の  
千変  
こ  
う。  
(1)  
(2)  
(3)  
(4)  
(5)  
(6)  
も  
現  
ある  
所)  
いる  
祖師  
祖  
代風  
で虹  
を見  
絵様  
しか  
一変  
てい  
平天



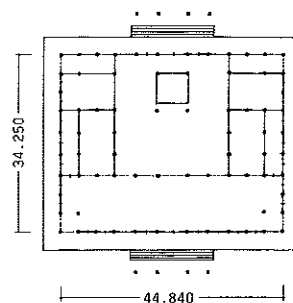
現法華堂平面



修復前祖師堂平面



修復後祖師堂平面



知恩院御影堂平面

携わる奉行、大工棟築の比重が大きく、平面間取りと建地割を決定していく。祖師堂については屋根型式は八幡造りと決めたのであろうが、その当時の決定事情については不明である。私は祖師堂の屋根意匠は日本建築の変遷の延長線上にあると考える。本殿の前に拜所が付加し発達した双堂建築や八幡造り建築については建築史のうえでたびたび登場する。八幡造り系は神社建築に多い。祖師堂を日蓮聖人の御霊屋とみたのであろうか。日本建築は一見変化のない伝統的建築の範疇として片づけられているが、朝鮮半島からの移入以来、技術の進歩によってさまざまな意匠や架構的發展を遂げてきた。千変万化の技法を有している。

ここで、祖師堂建築の特徴をあげると次のような点がある。

- (1) 法華経寺伽藍の中心的存在である。
- (2) 前身は御影堂建築である。
- (3) 屋根の形式に特徴がある。
- (4) 外観は質素で架構は和様を基調とする。
- (5) 内陣は極彩色の空間である。
- (6) 閉鎖的内陣(5間×4間)、大きな開放的外陣(拜所)をもつ。

現祖師堂は法華経寺の中心的存在で、御影堂からの発展であることは述べてきた。内陣の前に大きな吹き放しの外陣(拜所)を持つことは、江戸庶民の参詣寺としての性格を有していると言えよう。

## 祖師堂建築の意匠

祖師堂はまた、寺院法度の統制下、華美装飾を厳禁する時代風潮の中で建立された建築である。軒は二軒、組物は出組で虹梁や太瓶束を使用し、外陣(拜所)まで化粧屋根裏天井を見せ、軸組は貫構造とし和様である。木鼻彫刻、蟻股、他絵様彫刻は複雑でなく落ちついた質素な外観を形造っている。しかし、外陣と打って変わって内陣の空間は極彩色仕上げで一変する。塗装工事中であったが、旧彩色の箇所がよく残っていて須弥壇廻りと頭貫上部廻りは極彩色で描かれている。平天井には太田氏桔梗紋の花弁で埋めつくされて、まさに法

華経によるところの靈山浄土の世界を形造っている。

正面須弥壇上の厨子内には日蓮聖人彫像が安置され、両側には六祖師像が並ぶ。間取りは外陣を板の間として開放的で、内陣は建具で仕切られ閉鎖的である。両外側には板の間の側廊下が付き、奥には裏堂がつく。規模は桁行7間×梁間7間で修復前は内陣、両側廊下、外陣の一部まで大広間の畳敷きであって修復前後の平面の違いは著しい。内陣部分の5間×4間の架構規模は知恩院御影堂の内陣5間×4間の大きさに準ずる規模である。

## おわりに

祖師堂建築は保存修復工事によって修復前とは様相が変わりました。時代背景の点で間取りや使用勝手が異なる建築建立当初に戻すのであるから、文化財保存修復工事のソフト面での難しい問題がここにあると思います。五重塔や山門などの経年使用変化をほとんど受けない建築は、保存修復をしても使用上の影響は少ないのであるが、今回の祖師堂などの建築は経年の時代の風潮や要求される規模、そして信徒壇越との関係と敷地配置条件などによって変遷を受けやすいと言えます。祖師堂建築に限らずほかの用途の建築の保存修復後の文化財が充分にその時代において活用されていくことが大切でありましょう。また、先人が残してくれた建築を後世へ伝えていくことも大切であります。そのためにはさらに十分な資金と保存修復技術者育成の両面での充実を計ることが重要な課題であると言えます。

祖師堂建築は宗祖日蓮聖人を祀る御影堂として、法華経寺伽藍の中心的建造物でもあります。保存修復を期に法華経を生かす法華説法の霊場として、今後将来にわたって伝えられていくことを願う法華経寺祖師堂建築についての「見学記」の筆を置くこととします。

なお、今回の「祖師堂見学会」について便宜を計って下された、(株)日本建築構造技術者協会の木質系構造部会の皆様、並びに(財)文化財建造物保存技術協会と清水建設(株)の現地担当者の方がたにそして有益な講演をいただいた坂本功先生にこの場をかりて心からお礼申し上げます。